韓統連大阪通信紙
自　主
ﾁｬｼﾞｭ
３７８号
2022年8月号

자 주

発行　在日韓国民主統一連合
（韓統連）大阪本部
〒544-0034
大阪市生野区桃谷３－１３－６
TEL06-6711-6377　FAX06-6711-6378
毎月１日発行　購読料　年間3000円
郵便振替　00940-7-314392
民族時報社　大阪支社

加速化する韓米日３国軍事同盟（アジア版ＮＡＴＯ）その虚と実
～韓国への依存度を高めるバイデン政権と日本の焦燥～

７月２６日、韓国ＳＫグループ崔泰源（ﾁｪ･ﾃｳｫﾝ）会長がコロナに感染して隔離中のバイデン大統領と画像対談を行い、米国に新たに２２０億ドルを投資する計画を発表した。バイデン大統領は５月２０日、韓国を訪問した際、最初にサムスン電子の半導体工場を視察している。半導体生産世界第２位のサムスンと第３位のＳＫの生産工場を米国に作らせる狙いがある。ＳＫは中国にも半導体生産工場を稼働させている。バイデン政権が韓国企業の米国投資を促進している様子がうかがえる。

８月１日から韓米日３国とオーストラリアは、ハワイ洋上で朝鮮のミサイル探知・追跡連合訓練を実施する。高度化した朝鮮の核・ミサイルと中国のミサイルの迎撃態勢の完成度を高め、米本土へのミサイル攻撃を無力化する狙いがある。８月下旬に予定されている韓米合同軍事訓練は尹錫悦政権で行われる最初の訓練で、ミサイル防御と米戦略資産を動員する大規模なものとなる。米国営放送のボイス・オブ・アメリカは連日、尹政権が米国と歩調を合わせる姿勢に賛美を送り、文在寅政権との違いを強調している。

▲戦争の危機を招く
韓米日軍事協力STOP！

このような状況に朝鮮側は激しく反発している。金正恩委員長は７月２７日の「戦勝記念日」の演説で尹錫悦大統領を肩書なしで名指しして「韓国軍を壊滅させる」とし、米国には「応分の対価を払わせる」と発言している。朝鮮半島に黒い戦雲が漂い始めた。

バイデン大統領は朝鮮の核・ミサイルの脅威に対抗するため迎撃体制の強化に力を集中している。アフガニスタンからの撤退でわかるように米国の衰退は明らかであり、バイデン大統領の本土防衛計画に韓日の協力は欠かせない状況にある。同盟国を総動員して朝鮮への制裁を強め、人権問題や経済不振などのプロパガンダで朝鮮側の強硬姿勢の変化を促す狙いは成功するようには見えない。

ハノイでの朝米首脳会談が決裂して以降、朝鮮は米国への幻想を捨て軍事力で圧倒することで、米国を屈服させる戦略へと舵を切った。韓日へも同様に米国に追従する限り関係改善は望まない姿勢を明確にしている。

７月２６日のハンギョレ新聞の寄稿欄に「北朝鮮（※正しくは朝鮮）の変化にどのように対応すればいいのか（ﾁｮﾝ･ｳｸｼｸ/ﾊﾝｷﾞｮﾚ平和研究所長）と題した記事が掲載された。「対北政策を見直すべきだ」とし「北の核武装が取り返しのつかない水準であり、非核化は不可能になった。したがって対北政策も変化が必要だ」との指摘だ。さらに①北は韓米日との関係改善を放棄した。②北の経済は外部で考えるほど厳しくない。③経済制裁に対する北の判断が変わった（正面突破政策を指すものと思われる）などの理由を挙げて対北政策見直しの必要性を強調している。

朝鮮の目覚ましい発展はバイデン政権の対北敵視政策の見直しを迫っている。朝鮮はかつての朝鮮ではない。

同じように韓国も変わった。韓日関係は「慰安婦」問題、徴用工問題でギクシャクしている。ミサイル飛距離制限撤廃で衛星を打ち上げ、文政権時代の新南方政策で防衛装備輸出先の確保、ＳＬＢＭ成功など、尹錫悦政権といえども「対日屈辱外交」と国民からみられることは避けなければならないのは当然だ。今、尹政権がしなければならないことは、変化した南北が協力して東アジアの平和の基礎を築くことだ。（鐵）

韓統連セミナー2022
シリーズ「ウリ現代史」始まる
韓統連セミナー「ウリ現代史」第1回

韓統連大阪本部主催による韓統連セミナー２０２２ シリーズ「ウリ現代史」第１回「解放と分断～新祖国建設に向かう怒涛の時代～」が７月１７日（日）、ＫＣＣ会館（大阪市生野区）で開かれた。

セミナーでは、金隆司（ｷﾑ･ﾕﾝｻ）韓統連大阪本部代表委員が主催者挨拶を行い「韓統連セミナーは報告を聞くだけではなく、参加者の皆さんと討論を通じ学び、認識を深める場なので、ぜひ協力をお願いします」と語った。

▲韓統連セミナーで熱心に報告を聞く参加者

次に、金昌範（ｷﾑ･ﾁｬﾝﾎﾞﾑ）大阪本部副代表委員が報告を行った。金副代表は報告を通じ「１９４５年８月１５日、日帝の植民地支配から解放された朝鮮では、すぐに朝鮮建国準備委員会が結成され、独立に向けた動きを加速化させたが、１２月に米ソ英によるモスクワ外相会談で、５年間の信託統治が出された」と述べながら、「信託統治についてはわい曲報道などもあり、朝鮮民衆の大半は反対の立場だった」と指摘した。

そして、第１次米ソ共同委員会の開催（1946/3）以降の右派、左派の考えと米ソの思惑、南北連席会議（1948/4）開催までの動きについて詳細に解説しながら、南北連席会議開催の意義について、「金九（ｷﾑ･ｸﾞ）氏など右派民族主義者が積極的に行動し、南において統一運動の根を張る大きなきっかけとなった」と語った。

報告後は活発な質疑討論と今後の行事紹介が行われ、最後に金昌五（ｷﾑ･ﾁｬﾝｵ）大阪本部副代表委員が閉会辞を述べ、「ウリ現代史」第１回は終了した。

第２回目は９月１１日（日）午後２時から、ＫＣＣ会館で開かれる。

映画観賞をしながら、親睦と交流を深める
韓統連大阪本部「映画観賞会」

韓統連大阪本部主催による初企画「映画観賞会」が７月２３日（土）、韓統連大阪本部事務所で開かれた。

鑑賞会で上映された映画は「サムジンカンパニー１９９５」で、実話をモチーフに作られた大企業の不正を暴く女性社員の活躍をコミカルに描いた内容だ。

飲食をしながら映画観賞をした後は、映画の感想や韓国時代劇の話など気軽に語りあいながら、参加者間の親睦と交流を深めた。

朝鮮戦争休戦協定69周年を迎え
韓国ゲストがリモートで講演
日韓平和連帯集会

日韓平和連帯の主催で「朝鮮戦争・休戦協定締結６９周年 東アジアの恒久平和の実現をめざす７・２７大阪集会」が７月２７日（水）、ＰＬＰ会館（大阪市北区）で開かれた。

集会では、日韓平和連帯共同代表の山元一英さんが主催者挨拶を行った後、韓国進歩連帯常任代表の韓忠穆（ﾊﾝ･ﾁｭﾝﾝﾓｸ）さんが「尹錫悦政権下における韓日連帯運動の課題」をテーマにリモートで講演を行った。

▲リモートで講演する韓忠穆常任代表

韓常任代表は講演を通じ「尹錫悦政権は米国に追従して韓米同盟の強化、韓米合同軍事演習強化・実施など対北対決政策を積極的に行っている。このような状況では南北合意の履行、朝米関係の進展は期待できない」と語った。

そして「米国の新冷戦戦略は対北、対中敵対政策が核心」と指摘しながら、「今こそ韓日平和連帯運動の強化が求められる。朝鮮半島の平和は東アジアの平和と繁栄につながる。来年の停戦協定７０周年を平和協定元年にしよう」と主張した。

講演後は質疑応答が行われ、集会は終了した。

韓国サンケン電気闘争　勝利的解決をかちとる！

韓国サンケン労組を支援する大阪市民の会代表　濱本満夫

●日韓民衆の連帯こそが勝利の鍵！

一昨年７月、サンケン電気（本社・埼玉）は突如組合員に何の話し合いもなく、赤字を理由に１００％子会社の韓国サンケン電気の会社清算、労働者全員解雇を発表しました。

韓国サンケン労組は、日本資本のサンケン電気を相手にした偽装廃業撤回と復職闘争の約２年間に及ぶ７２４日という長い闘いの中、７月６日、労使間交渉を行い妥結し、争議を勝利的に解決しました。

韓国サンケン労組はサンケン電気の株主総会前の６月２０日、ソウルにあるサンケンコリアのビル階下のサンケン電気とＬＧ電子の合弁企業であるＡＰＴＣに「話し合い」を求めて２４時間のロビー占拠、ろう城闘争に立ち上がりました。

▲韓国サンケン労組と連帯して闘ってきた大阪市民の会

この２年間、理不尽な不当解雇と会社廃業に対して、サンケン電気に話し合いと争議解決を求めてきたのに、一切の交渉の窓口さえも開かず要求を無視し、無責任な対応に終止してきたことに対して組合員は「決着をつける最後の手段」として、サンケン電気とサンケンコリアに「我慢に我慢を重ねてきた」気持ちを命がけの決死の行動に打って出たのです。

●日本・韓国での連続闘争で追いつめた！

そして韓国サンケン労組は２４時間占拠闘争から、ついにハンガーストライキ（断食闘争）に突入しました。この命を懸けた決起にサンケン電気は交渉にも応じず、このような状況で７月５日までの１４日間連続で決死のハンスト闘争が行われました。組合員は血圧や血糖値に異常をきたし、視力に問題を起こすなど極限状態にありました。

そのような状況の中、韓国内での占拠、ハンスト闘争、そして日本における埼玉本社、東京事務所、大阪支店での６月株主総会を山場にした闘い、また連携企業への争議解決要請行動、さらに韓国内でのＬＧ財閥への批判が高まり、国会議員や政党がＬＧへ押しかけ、聯合ニュース、ＫＢＳテレビなどの報道にサンケン電気は追い詰められたのです。事態の深刻さにやっと気がついたサンケン電気は７月５日、これ以上の問題拡大を恐れ、遂に「開かずの扉」を開け、急転直下で交渉に入りました。

●命がけの闘いでサンケン資本に勝利！

韓国サンケン労組は７月５日に労組総会を開き、この解決案を投票で決め、不満もありましたが受け入れました。妥結内容は非公開になりました。そしてハンストも中止、約２年間近くにわたった争議に終止符が打たれました。私たちは韓国サンケン労組の決定を断固支持します。

私たち大阪市民の会は一昨年１１月以降、毎月、毎週延べ５０回近く梅田にあるサンケン大阪支社前での抗議行動を闘ってきました。この行動に参加、そして支援して下さった皆さんにサンケン闘争の勝利を報告できたことを喜びたいと思います。

韓統連大阪本部をはじめ日韓・日朝連帯を闘う仲間たちとの共同した闘いがコロナ禍の中、訪日遠征闘争ができない韓国サンケン労組の忸怩（じくじ）たる気持ちを我がものと置き換え、心を一つにした闘いが勝利の力となったのではないでしょうか。また統一マダン生野にも招待を受け、舞台でのアピールや出店、カンパ活動の場の提供など多くの協力と在日同胞の皆さんの熱い支援に感謝します。

私たちもこの２年間の闘いの教訓をしっかり受け止め、新たなる日韓民衆連帯運動の創造を目指していきたいと思います。

投　稿

新冷戦と新北風

金恨源（キム・ハンウォン）

◆終わらない戦争

ウクライナ戦争が始まって５ヶ月以上が経過するが終戦の見通しは立っていない。国連は６月末までに民間人約４７００人の死亡を確認しているが、兵士の犠牲者数は当事国が機密情報ということで公表しないため正確な数は不明だ。いずれにしても多くの生命と貴重な財産が奪われてきたし、そして戦争が続く限り、これからも被害が増え続けていくことになるだろう。１日も早く戦争を終わらせなければならない。

ロシアへの経済制裁も、ウクライナへの武器支援も、戦争終結には何の効果もないことが明らかになっているにもかかわらず、なぜ継続されるのだろうか。「金持ちが戦争を起こし、貧乏人が死ぬ」というのはサルトルの名言だが、この戦争で誰が莫大な利益を得ているのかを今一度、冷静に判断する必要があるだろう。

▲韓国内で掲げられた横幕
「この地は米国の戦争基地ではない」

◆バイデンの新冷戦

ウクライナ戦争を契機にバイデン政権は中国・ロシアを同時に包囲するための「新冷戦」戦略を打ち出した。６月末に開催されたＮＡＴＯ（北大西洋条約機構）首脳会議は、ロシアを「最大で直接的な脅威」と位置付け、中国が「ＮＡＴＯの利益や安保、価値観に挑戦している」とも指摘した。ＮＡＴＯは欧州を超えてインド太平洋まで活動の範囲を広げ、米国のインド太平洋（対中国包囲）戦略と連動することになった。

米国がタリバンに屈し、アフガニスタンから惨めな撤退をしたのは昨年の８月だ。第二次大戦後の米国は圧倒的な経済力（ドル）と軍事力を持っていたが、今の米国にはその当時のような力はない。一方、中国は世界１９０ヶ国中１２８ヶ国の最大交易国となっており（２０１８年）、２０３０年代にはＧＤＰで米国を追い抜くと言われている。ロシアなど新興５カ国（ＢＲＩＣＳ）も台頭し、米国と一線を画している。さらに中南米諸国では米国離れが急速に進んでいる。反米左派政権が続々と誕生し、６月にはコロンビアでも初めて左派政権が誕生、１０月のブラジル大統領選挙も左派候補が優勢である。

政治力は経済力とも言われる。今の米国の政治力（経済力）と中国・ロシアをはじめとしたそれに対抗する諸国との総合的な力関係から判断して、中国・ロシアを包囲するのは容易ではない。東西冷戦は４０年以上も続いたが、新冷戦は長くはもたないだろう。

◆尹錫悦の新北風

アジアで米軍基地があるのは韓国と日本だけだ。新冷戦の命運は米国を支えるアジア最大の親米国の日本と韓国にかかっているといっても過言ではないだろう。

与党が絶対多数の日米同盟は盤石だが、韓米同盟はどうだろうか。５月に発足した尹錫悦政権は米国の新冷戦政策の先鋒隊として奔走し、国内的には前政権の南北和解政策を「屈辱（従北）外交」と攻撃し、「新北風」旋風を巻き起こしている。過去の事案を再調査し、関係者を逮捕・投獄し、最終的には文前大統領にも狙いを定めているのだが、就任２ヵ月がたっても閣僚人事が決まらず、失言や与党内の内紛で支持率が３０％台まで急落している。

韓国は革命の国だ。韓米同盟、駐韓米軍に対しても反対の声は小さくない。いつまで続くかわからない「新冷戦」を支えるために、「新北風」を必死で吹き続けている尹大統領の姿が、朴槿恵元大統領とだぶって見えるのは私だけだろうか。

【コラム】　夏痩に良しという物

２０２２年の土用丑の日は、一の丑が７月２３日。ついで二の丑は８月４日になる。土用丑の日にウナギを食べる習慣は江戸時代からだが、夏痩せ（夏バテ）に対してウナギが効くという話は奈良時代からあるそうだ。

土用とは中国の陰陽五行説に則って定められた雑節で、立春・立夏・立秋・立冬の直前の各１８日間の期間をいう。年に４回、土の気運が旺盛になるこの期間は「土旺用事」と呼ばれ、略して「土用」と呼ばれている。

夏の土用は立秋前の１８日間で、その期間内の丑の日が土用丑。なので、その年の十二支の巡り合わせによって、二の丑があったりなかったりする。最近は安い鰻丼の店もあるので、２回食べるのも良いかもしれない。

一方、韓国には三伏（ｻﾑﾎﾞｸ）という行事がある。夏の３回の伏日に滋養食（補陽食・ﾎﾟﾔﾝｼｸ）を食べるというもので、参鶏湯（ｻﾑｹﾞﾀﾝ）や補身湯（ﾎﾟｼﾝﾀﾝ）、小豆粥（ﾊﾟｯﾁｭｸ）が挙げられる。

▲滋養食としてよく食べられる参鶏湯

「伏日」とは、これも陰陽五行説による俗節で火の気運が強い真夏、庚（陽の金）の日は「火剋金」にあたり、庚は火に負けてしまう。そのため強すぎる火の気運が、猛暑や伝染病となって人を害する凶日となるそうだ。

そして「三伏」は真夏に訪れる初伏・中伏・末伏の３つの伏日の総称。夏至以後の３回目と４回目の庚の日を初伏・中伏とし、立秋以後の最初の庚の日を末伏とする。今年は７月１６日、２６日、８月１５日が三伏となり、越伏（ｳｫﾙﾎﾞｸ・中伏と末伏の間隔が２０日の巡り合せ）となる。

伏日にやってくる猛暑の凶災を打ち祓うための祭祀は古くから行われてきた。中国古代の史書である『史記』によれば春秋戦国時代の紀元前６７６年、秦の徳公が街の四大門に狗を磔にして、熱気と悪気を祓う行事を執り行ったのが最初の伏日祭祀とされる。これから数えると実に２７００年近くの歴史がある。

漢の時代には外出を慎む日とされた。三国時代の程曉（程昱の孫）は当時の様子を詩に残している。「平生三伏時、道路無行車、閉門避暑臥、出入不相過（三伏の時はいつも、道路を行く車などない。門を閉じて暑さを避けて寝る。家を訪ねて行き交う人もいない）」（程曉『嘲熱客』）。

韓国では早くからこの行事が取り入れられ、高麗時代に三伏は官吏の休暇日とされ、また工事を禁じるよう命じられた。猛暑の中で身体を損ねることを憂慮したのかもしれない。

その後の朝鮮王朝時代になると、料理についての記述が現れる。ソウルの歳時記である『洌陽歳時記』には伏日の行事として、「狗を煮て汁物を作り陽の気を助け、豆を煮た粥で疫病を祓う」と紹介されている。おそらくこの時代に夏の暑気を祓う料理が定着してきたのではないだろうか。

「狗を葱と煮て蒸しふかす。名を狗醤と言う。鶏や筍を入れると更に佳し。また汁物を作り、番椒（唐辛子）粉を添えて、白飯に注いで行事の食事とする。発汗して暑気を払い虚を補う。市中またこれを売るもの多し…（中略）…赤小豆粥を煮て食事とする。三伏は皆、この通りである」（『東国歳時記』六月、三伏）

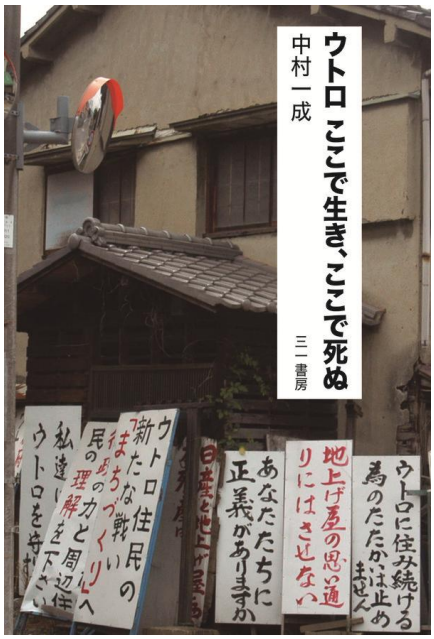
朝鮮王朝時代は補身湯や小豆粥が三伏の料理とされてきたが、現代の韓国では鶏肉の中に高麗人参やもち米を詰めて煮込んだ参鶏湯や、ウナギのスープ（ﾁｬﾝｵﾀﾝ）が多く食べられている。夏を乗り切り、いかに健康に過ごすかについて腐心してきた文化がうかがえる。（好）

「ウトロ平和祈念館」訪問と中村一成（イルソン）著「ウトロ　ここで生き、ここで死ぬ」

三一書房・2800円+税

７月３日、韓統連三重本部と韓青三重本部主催の「耳塚・ウトロ平和祈念館フィールドワーク」に参加しました。京都府宇治市ウトロは、もともとは漢字の「宇土(うど)口(ぐち)」であったものが、現在では正式な地名となっています。１９４１年に京都軍事飛行場の計画が持ち上がり、１３００名余りの朝鮮人を動員し建設が急がれましたが、日本の敗戦で計画はとん挫し、その後もウトロに残された朝鮮人は、アメリカ進駐軍と日本政府による無権利状態の中、ウトロでの劣悪な生活を余儀なくされました。

著者はダブルルーツの３世として、２０００年春から実に２０年に渡りウトロを取材してきました。祈念館三階には今は亡きハルモニ（お婆さん）、ハラボジ（お爺さん）の写真が掲げられていますが、著者とその一人一人との会話がウトロの歴史と人生を浮き彫りにしています。



「台風が来ると水浸しですわ。私ら正直ウンコの中を泳いでいたようなものです」「当時の家は稲わらをかぶせて屋根にしてた。劣悪ですらない。それ以下だった」。しかし、それらの話の中でもいつも笑いと共にあると著者が感じるウトロ住民の逞しさが、おそらく著者をしてさらに深くウトロを知りたいと願う瞬間であり、著者のルーツに関わる根っこをそこに見ていたのではないでしょうか。

１９８９年、そんなウトロに強制退去の知らせが入ります。土地の所有権が日産車体から西日本殖産に移り、重機とトラックが押し寄せた物理的な退去強制でした。最高裁判決でも退去が確定し追い出される窮地に立たされた住民の捨て身の闘いが始まります。ウトロの入口に立つ手書きの看板「ウトロに住み続けるためのたたかいは止めません」「ウトロはふるさと。ここで生きたい」。

この闘いはウトロ住民の意識を覚醒させました。取り分けてもハルモニたちでした。民族差別と男尊女卑により生きることを否定されることの多かったハルモニたちは、運動の中で本名を名乗り、集会では堂々と発言し、何より民族衣装をまとい農楽隊を結成しデモの先頭を練り歩く。あるハルモニは「胸が熱くなってきました。血が騒ぐような不思議な力が、ウトロを生きる自分の中の民族性を表現するものになっていった」。私はこういうハルモニが大好きです。結局強制退去は韓日市民と韓国政府の支援でウトロ地区の三分の一を買い入れることで決着しました。

今回の訪問で案内員の方に昨年８月に放火事件のあった現場を案内してもらいました。看板があったウトロ入口でした。いまだに放火の後は残り、炭となった住居の柱、火の勢いでねじ曲がった鉄、延焼にあった家。死傷者が出なかったのが幸いでした。犯人は逮捕され、裁判中であるが反省のかけらもありません。ヘイトスピーチ、ヘイトクライムが平然と行われる時代なのです。

私は小学校から高校２年まで名古屋市東山公園の横にあった「朝鮮人部落」で育ちました。およそ６０軒くらいでしたが、今の私の民族と共に生きる原点です。そこには井戸があり、豚小屋があり、朝鮮学校の分校があり、民団系、総連系が仲良く仲悪く住んでいました。井戸で遊ぶと一世から朝鮮語で叱られ、親戚の家は雨が降るとしょっちゅう床上浸水していました。ここから早く抜け出したいというのが私の気持でした。大きな通りから部落に入る時は思いっきり、素早く踵を左に切り、周囲から見られるのを恐れていました。何と滑稽なことかと今は思いますが、当時の情けない差別される側の意識が、こんなところにも表れていました。

ウトロの歴史は日本のどこに住んでいようが等しく私たち在日の歴史です。１世の過酷な歴史の上に今の私たちの生活があります。忘れてはいけません。著者の長きにわたる取材に敬意を表し、多くの人がこの本を手に取ることを期待しています。ちなみに次回の韓統連三重本部のフィールドワークは「長野松代大本営」の予定です。ぜひご一緒しましょう。（源）